始

特100
95

子供詩

ハトポッポ

大手八郎作
竹久夢二繪

大正
3. 4. 6
内交

この「ハトポツポ」一羽を小野
有香兄にさし上げます

八郎

「ハトポツポ」に

小野有香

磐梯山下の押立で
長い湯治の八郎さんが
こんな可愛いいぢらしい
「ハトポツポ」をばくれました
貰つたわたしは朝夕に
手放せないで今日までは

抱いてかゝへて哺んで
頬ずりしてはゐましたが
こんな可愛いみどり兒を
いつまで斯うして置かれよか
晴衣を着せて世の中へ
出してやりたい親ごころ
それをおもふてわたくしは
親しい**夢二**の小父さんを

訪ふて頼んだその晴衣
ゑがほ見たさの願望から
夢二小父さんアメリカへ
行くさてほんにいそがしい
日も夜も足らぬ間から
こんな晴衣をくれました
斯うして生れた「**ハトポッポ**」
お前はどんなにうれしかろ

泣(な)いてよろこぶ親(おや)ごころ
都(みやこ)そだちの扮裝(なり)を見(み)て
いとし可愛(かわい)のみどり兒(ご)よ
あこがれがちのそのひとみ
溢(あふ)るゝばかりのそのゑくぼ
忘(わす)ろまいぞへいつまでも

子供詩 ハトポッポ

目次

ハトポッポ……一
となりの小猫(こねこ)……五
ポチの願(ねがひ)……九
蝶(てふ)と雲雀(ひばり)……一三
厨(くりや)の鼠(ねずみ)……一九
ひな祭(まつり)……二三
ボートレース……二七
巡査(おまはり)さん……三一

ポチの悲……三五
ひな鳥……三九
おいのり……四三
花祭……四九
田植……五三
ひき蛙……五七
螢……六一
七夕……六五
蓮……六九
お地藏さん……七三
日の丸……七七

かみなりさん……八一
ゆふべの夢……八五
七草……八九
子守唄……九三
お庭の晝……九七
美ちやん……一〇三
巡禮娘……一〇七
お島……一一三
小さな母……一一七
オテガミ……一二三
飛行機……一二七

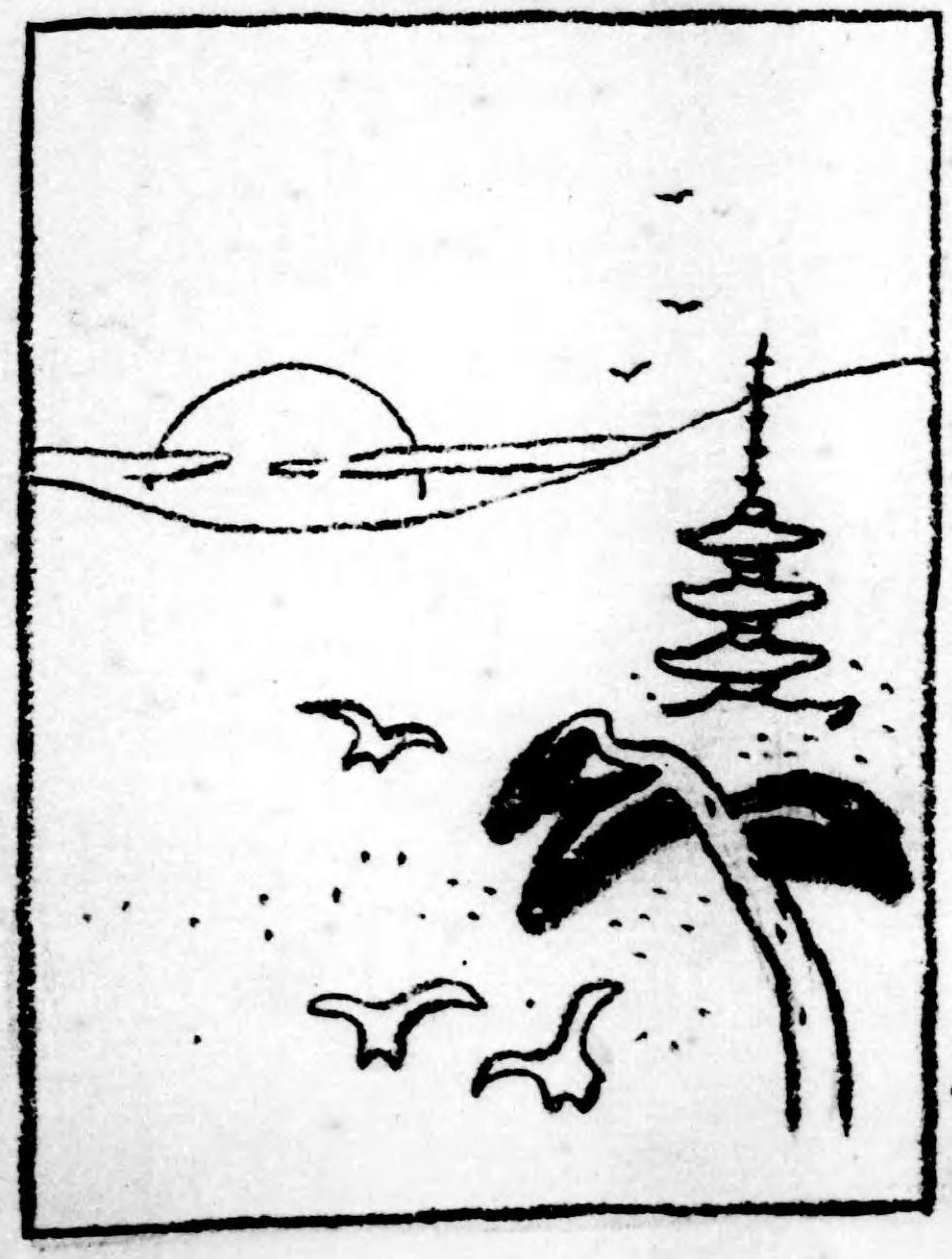
案山子……一三一
仁王様……一三五
めくら鬼……一三九
けんくゎの後……一四三
跡……一四七
おしばゐ……一五一
小さな客……一五七
不思議……一六一
ごはんの後……一六五
秘密……一六九
おはなし……一七五

朝……一八一
小猫……一八五
郵便屋さん……一八九
かくれんぼ……一九三
梅……一九九
小犬……二〇三
海男兒……二〇七
誕生日に……二〇八
「ハトポッポ」に

ハトポツポ

お寺の屋根の
ハトポツポ
あすの天氣を
たづねてみたら
あれさごらんよ
夕やけこやけ
日さまてる〱
明日は天氣
お寺まゐりが

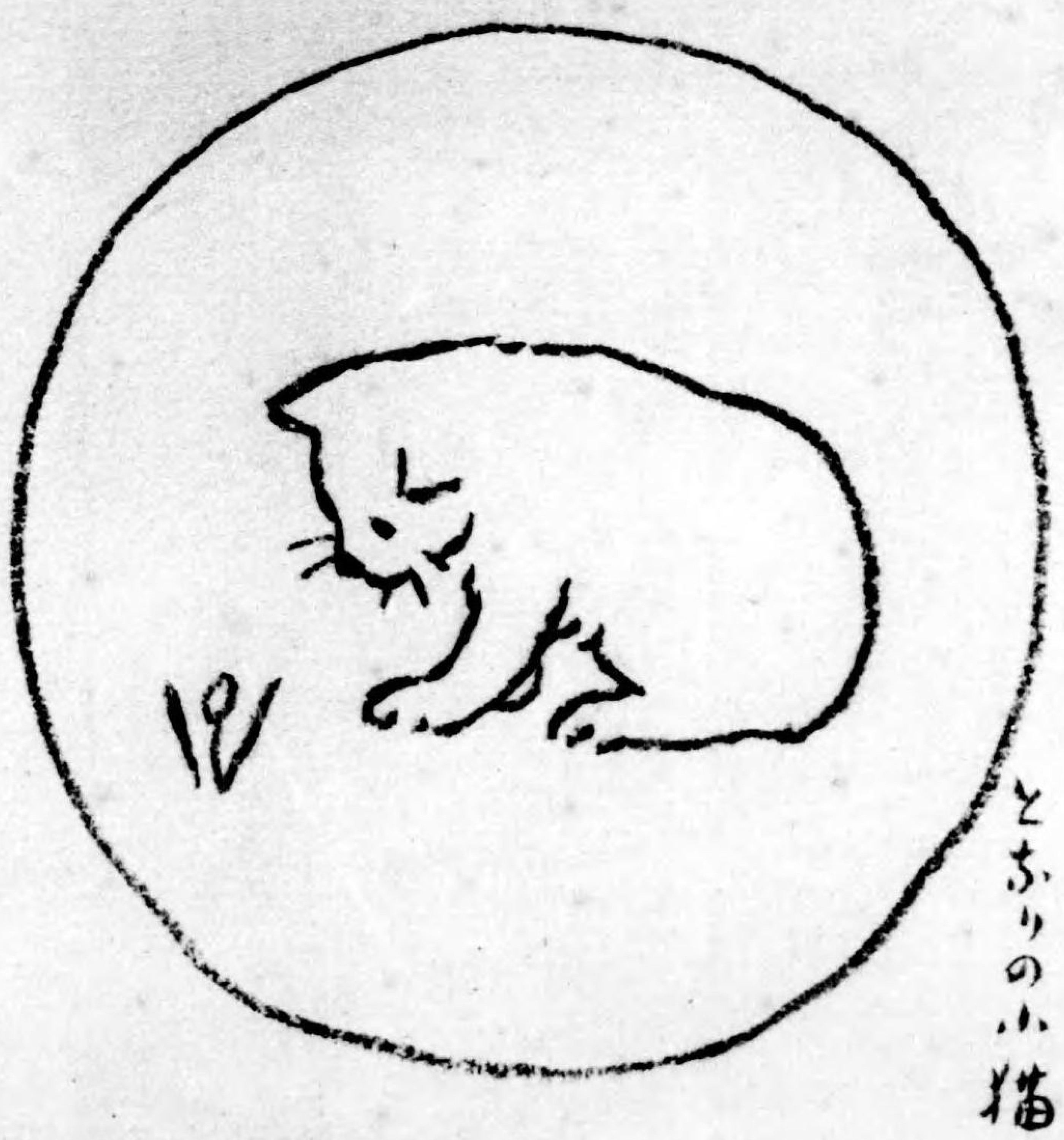
朝(あさ)からつゞく
雨(あめ)はふらいで
豆(まめ)がふる。



ハトぽっぽ

隣の小猫

となりのこねこは
よい小猫
今朝も垣根で
わたしをのぞく
ちよつと名前を
たづねてみたら
坊ちやん私に
コラといふ
美ちやん私を



タマと呼ぶ
お三はわたしを
バカといふ
私の名まへは
何でせう?。

ポチの願

ポチが頼んで
いふことに、
母さまおつぱい
ちやうだいな
はやく私も
大きくなつて
お家の番を
よく守り
お暇にちよつと

タマちやんを
隣の垣根に
おひまはし
大に勇氣を
ふるひたい。

蝶と告天子

一

ひばりやひばり
鳴く告天子
天にのぼつて
またおりて
何をペチヤペチヤ
ないてゐる?。

二

そんなに蝶々は

いふけれど
わたしはつらくて
泣くのでない
春が來たから
歌うてる。

三

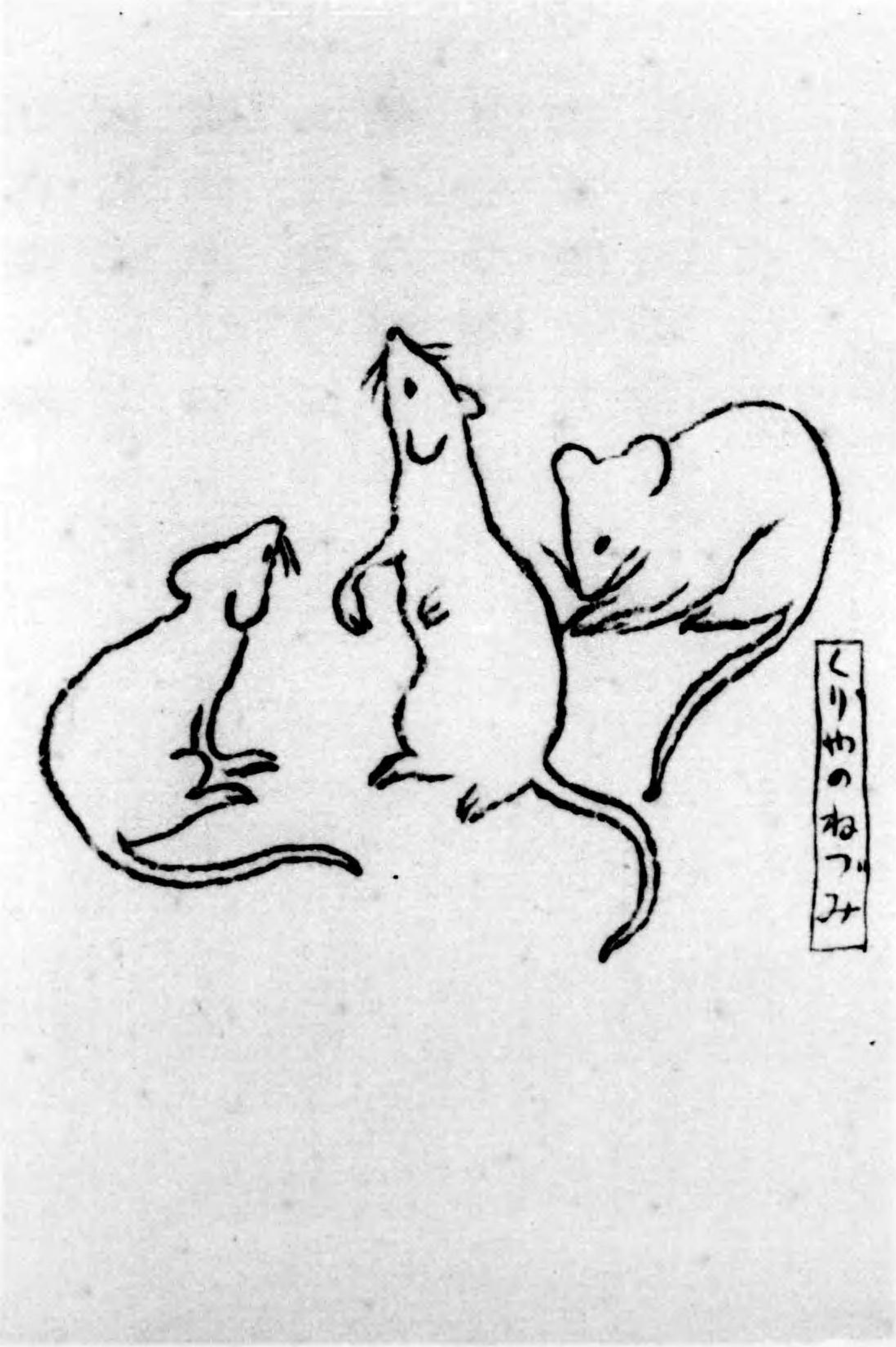
おや／＼ごめん
さうですか
私もやつぱり
春が好き
あなたが歌を

うたふなら
わたしは舞を舞ひませう。

蝶と雲雀

厨の鼠

うちの厨に
鼠が三つ
おしづ小猫の
晝眠の間に
コトリ、コトンと
やつてくる。
母さま鼠の
いふことに、
これ／＼坊や



いけません
そんなに走ると
音がたつ
おとを立てると
角がたつ
おしづ小猫が
目を覚ます。

雛祭

一

けふは樂しい
ひな祭
ならんだお顔は
うつくしや。

二

きれいに咲いた
桃の花
かざるも嬉し

雛のため。

三

あられが好きか
ひし餅か
白いお酒も
めしあがれ。

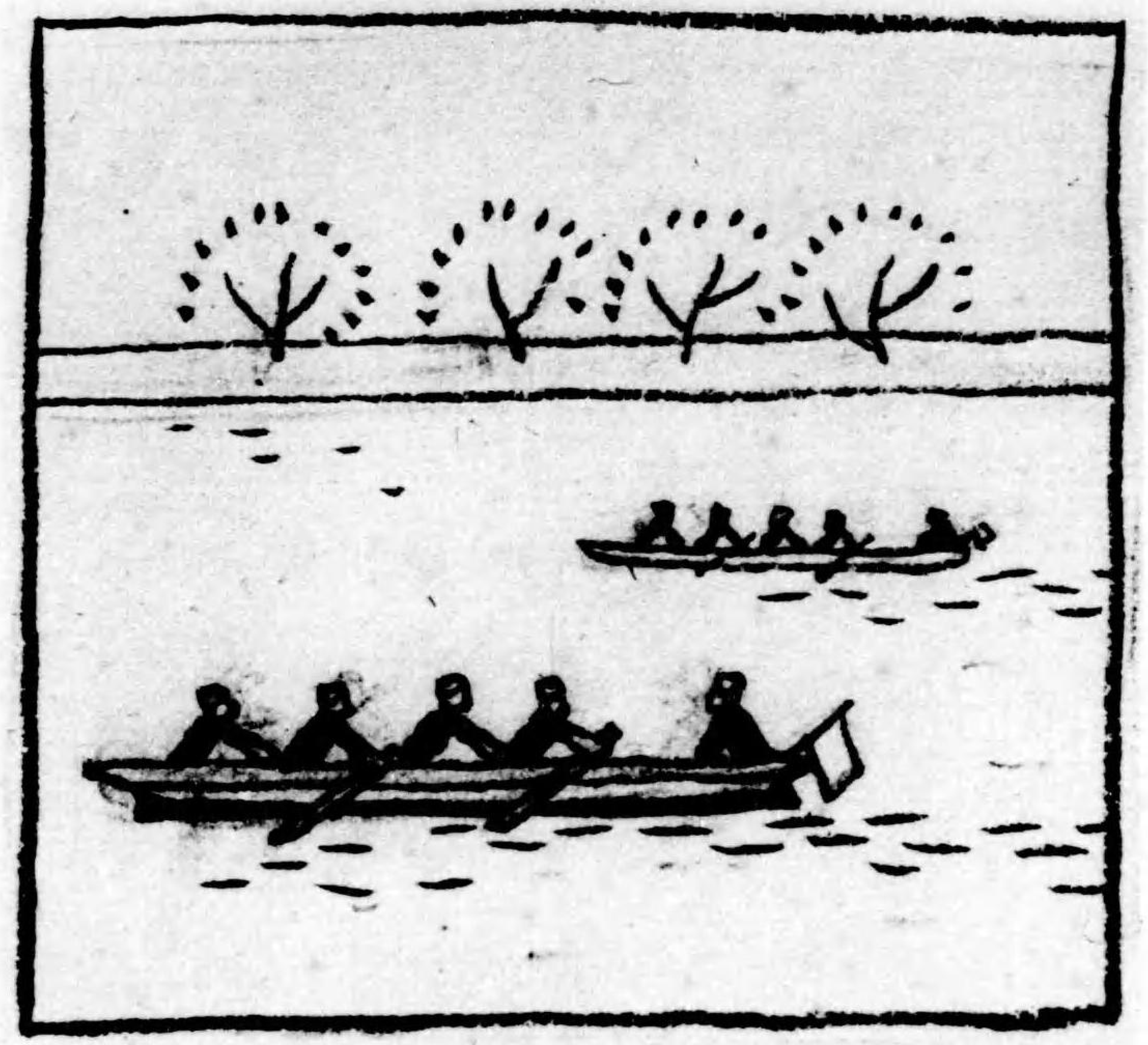
四

ならぶ御馳走の
かず／＼は
今日の祝ひの
しるしぞや。

ボートレース

一

見よや墨田に
うかべるボート
オール揃へて
乗りこむ選手
こゝを必死と
漕ぎ出す姿
咲いた櫻の
日本男子



ボートレース

二

ひくな敗けるな
進めや漕げや
今日を晴れ場の
ひごろの手練
咲かせて見せよ
チャムピオン。

巡査さん

一

僕が學校へ行くときに
道のみちのまんなかに
おまはりさんが
立つてゐる。

二

帽子をとつて
オハヨーと
朝のあいさつ

してみたら
お手をあげて
しつけいした。

三

ぼくがお家に
かへるとき
いつしよにかへろと
云ふたれば
かぶりかんぶり
ふりました。

ポチの悲(かなしみ)

一
泣(な)くなよポチよ
なくでない
すや〳〵寝(ね)てそれ
目(め)をつむれ
しんぱいするな
捨(す)てはせぬ。

二
三(みつ)つ生(うま)れて

ポチのかなしみ

乳のんで
二つはよそへ
もらはれて
一つ殘つた
ふしあはせ
川にすてると
誰いうた
泣くなよポチよ
捨てはせぬ。

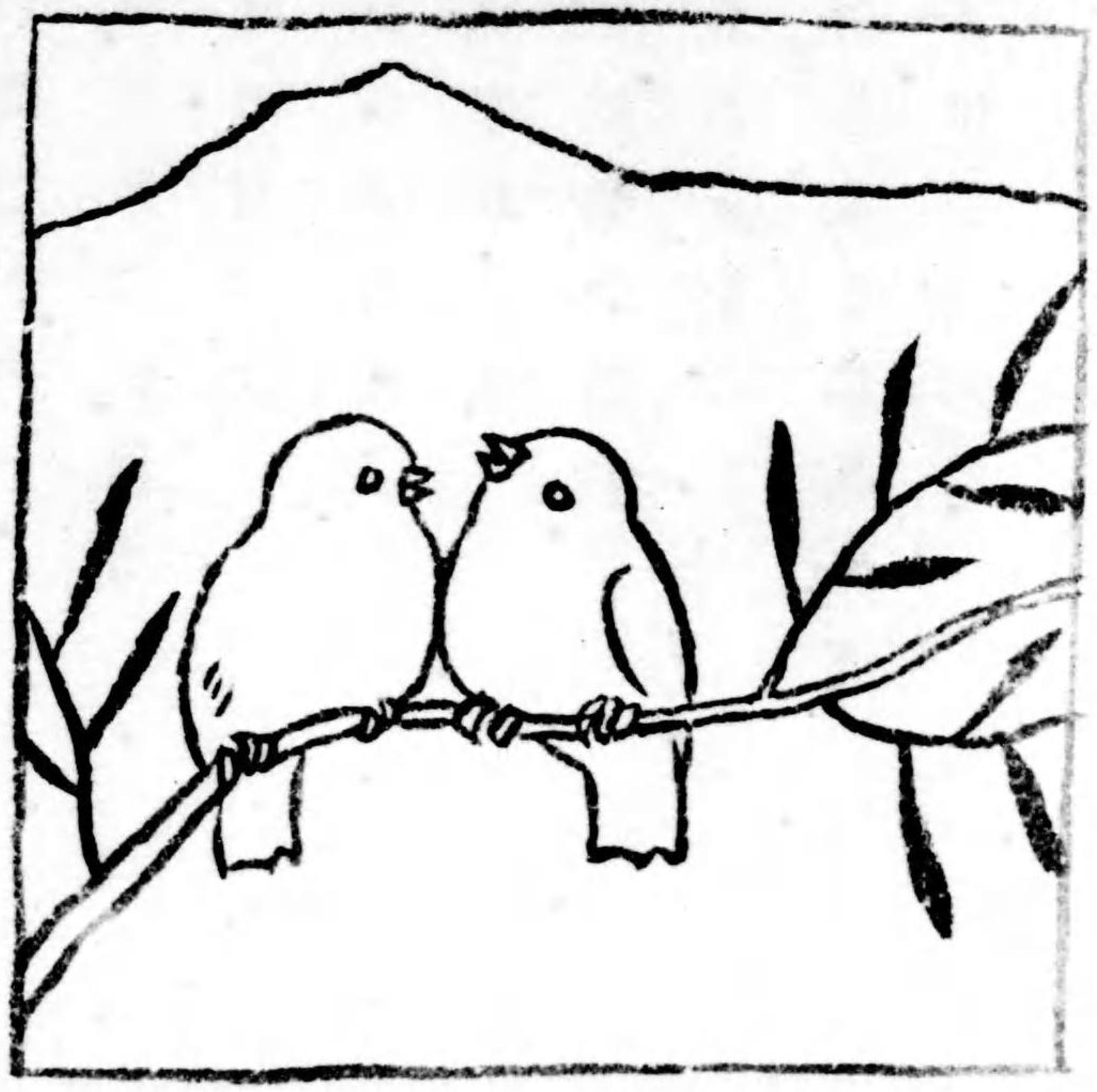
雛どり

一

今朝もはよから
母さまが
朝のごはんを
さがすとて
家を出たまゝ
かへらない
どちらの里へ
行つたやら。

二

さつき聞いたる
砲の音
あたしは何だか
氣にかゝる
羽が立つなら
兄さまと
いつしよに行つて
さがそもの。



ひなどり

おいのり

一

「エスさまエスさま
千代ちやんは
お目をつむつて
手を組んで
ちんと坐つて
うつむいて
かうしてお祈り
いたします。」

二

「エスさまお早う、
今日もまた
樂しいよい日を
千代ちやんに——
エスさまよい日を
千代ちやんに——
私はおいのり
いたします。」

三

「お星のかゞやく

夜はまた
白い寢床で
母樣の
お唄をきいて
すや／＼と
樂しい夢を
みるやうに
私はお祈禱
いたします。」

おいのり

花祭

ゆふべお空の星さまが
ちら〳〵降つて地に咲いて
薫ゆかしい五色の花と
エスの御堂に匂ひ出で
今日は樂しき花祭。

歌ひませうよお聲を揃へ
「花よお花よ
きれいなお花

咲くやとり〴〵
赤、白、黄いろ
神の姿か
天女の頰か
星が地に咲く
瑠璃の色』

田植

一

けふは忙しい
おうちの田植
丸い菅笠
千鳥の襷
早苗もつ手も
指さき輕く
植ゑてゆきます
姉さんが。

二

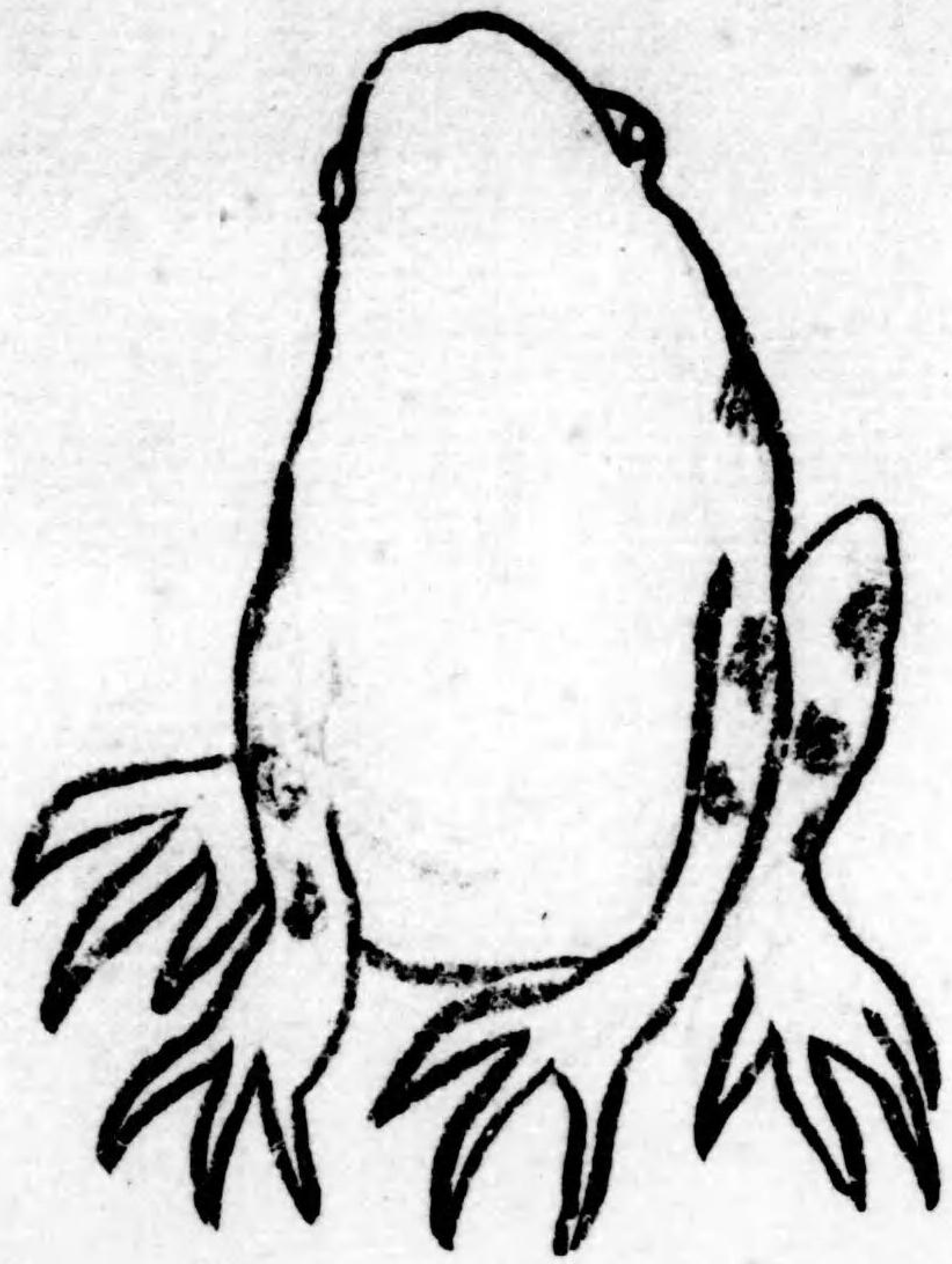
あれさごらんよ
水田の中で
笠が浮いたり
沈んだり
聞えますかへ
田植の唄が
風に吹かれて
とんで來る。

ひき蛙

両手つかへて
目玉をむいて
天をにらんだ
ひき蛙で

からだばかりが
大きくて
あんまり智ゑも
なささうな。

うかとは出るな
道中へ
みちにゃお馬が
通ります。



ひきがへる

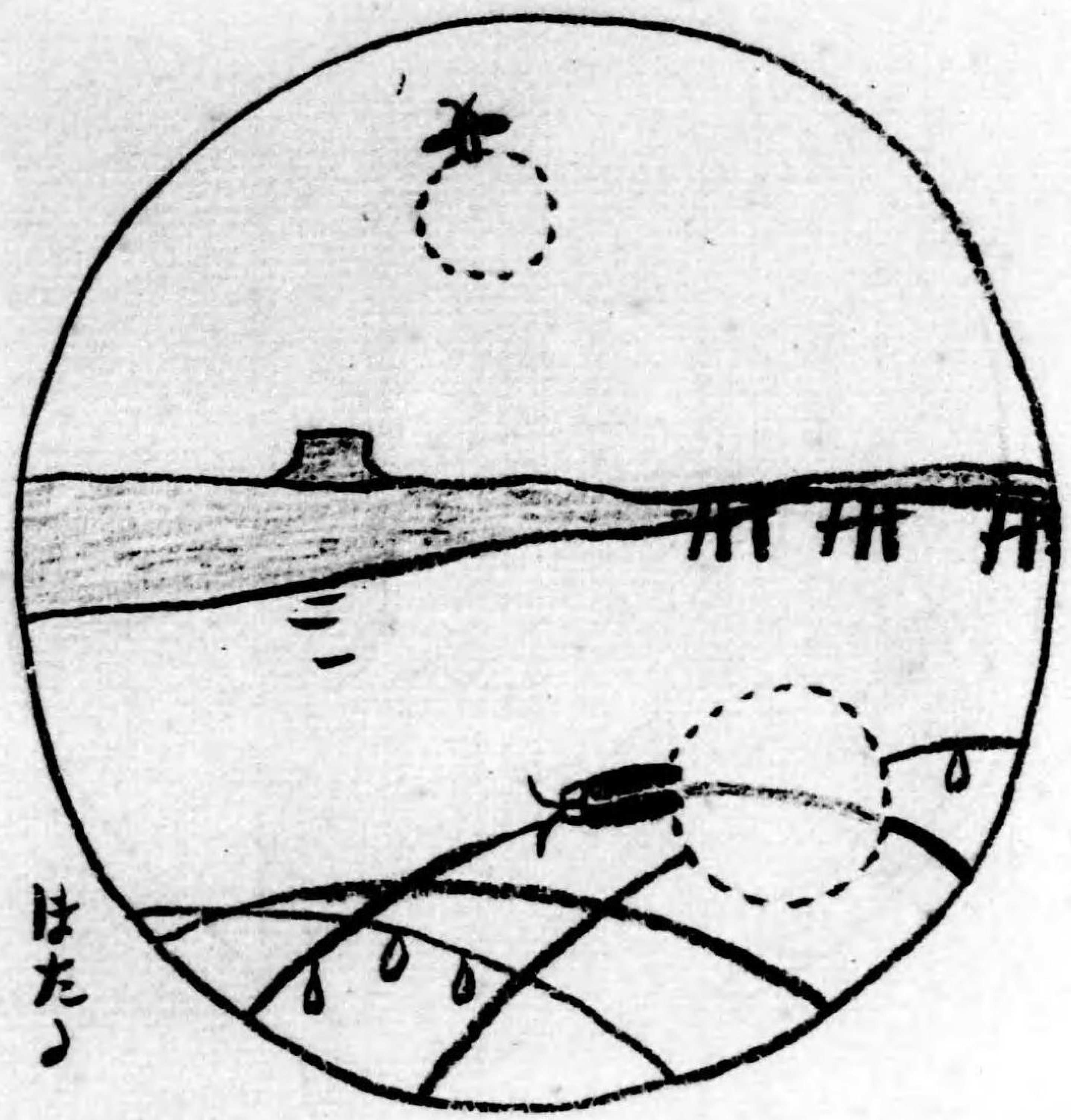
螢

一

ほたるや螢
提灯つけて
お前は今宵
どこへ行く。

二

わたしは向ふの
川岸へ
おいしい露を



のみにゆく。

三

露がほしいか
のみたいか
それでは此方に
とんで來い
こゝには甘しい
露がある。

七夕

竹に短冊
五色に咲いて
天の河原は
星明り
祭りませうよ
七夕様を
うれし今宵は
星祭。

天の川
星のため洗ふ
硯も紫の色こ
きほどのことの
七夕

蓮(はす)

一

咲(さ)いたひらいた
蓮(はす)の花(はな)
お池(いけ)なかに
まんまるく。

二

きのふは三(みつ)つ
今日(けふ)七(なゝ)つ
あすはみんなで

咲きそろへ。

三

蓮はよい花
きれいに咲いて
散ればお池の
舟となる。

お地藏さん

一

辻に立つてる
お地藏さんは
いつ來てみても
よだれかけ
赤ちやん姿が
をかしいな。

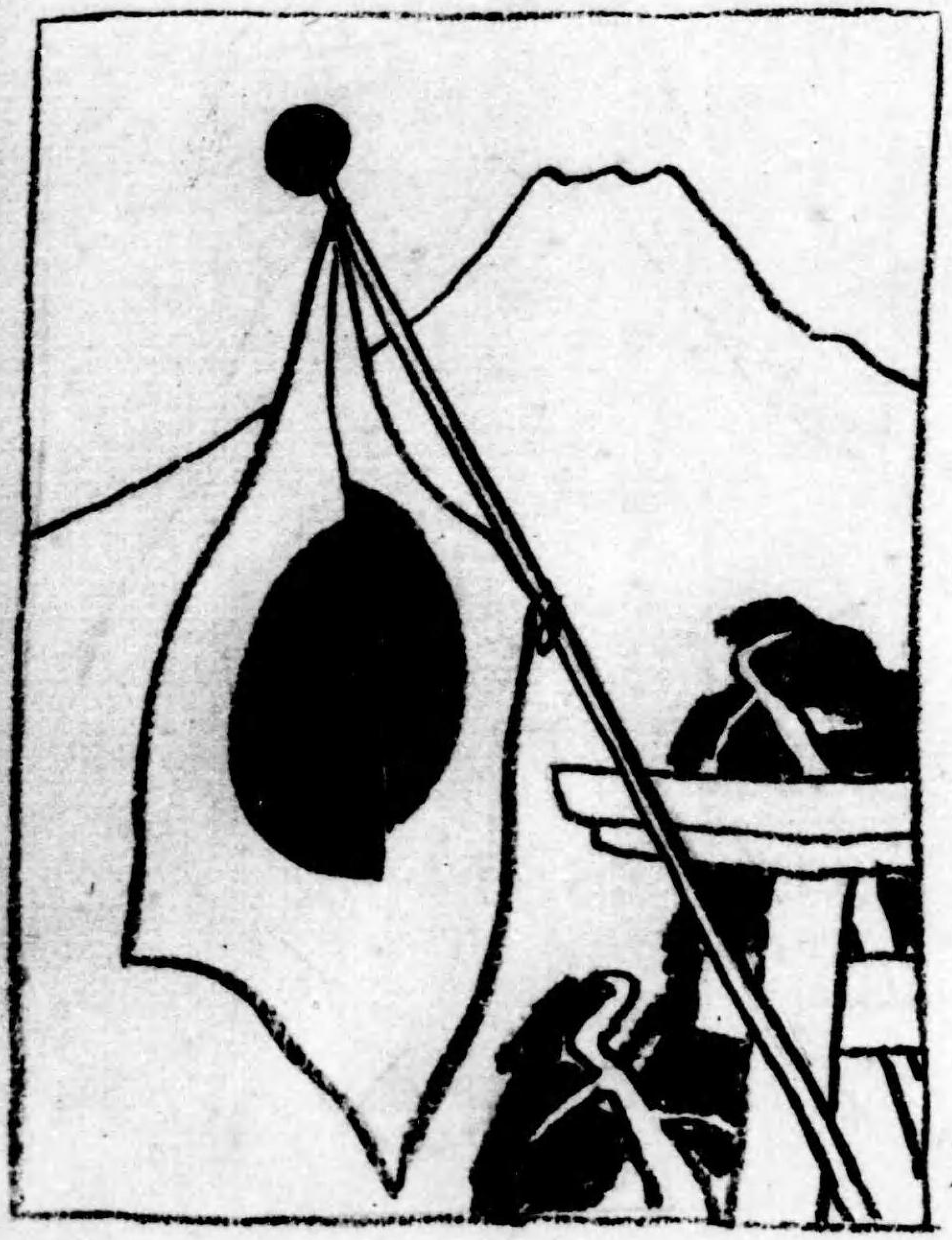
二

烏が啼いて

夜が明けて
月日が經てば
歳も立つ
あなたはどうして
年とらぬ？。

日の丸

見よや我らの
國の旗
みよや日本の
日の丸は
世界に類なき
旗なるぞ
みよや見よ。



日の丸

かみなり様

一

夏の眞晝に
くろ雲おこし
ごろごろごろと
鳴りはためいて
天地ゆるがす
雷さんは
日本一のあばれ者。

二

障子をしめよ
それ戸をたてろ
蚊帳をつれ〳〵これ〳〵早く。
坊やを泣かす雷さんは
日本一のいたづら子。

ゆふべの夢

一

母様ごらんよ
カナリヤが
お目をつむつて
うつむいて
今朝から何も
食べませぬ。

二

ゆふべの夢が

氣にかゝる
もしもや死ぬので
あるまいか
母さま私は
どうしませう？。

ゆふべの夢

七草

おもてを通る
花屋さん
今日のお花は
なに〳〵ぞ
桔梗かるかや
女郎花
咲いてゆかしい
撫子や
露をふくんだ

萩の花
秋の千草は
いま盛り
そろへませうか
七草を。

子守唄

ねんねんころりよ
おやすみよ
お目をつむつて
唄きいて。
うたは何うた
子守唄
里の子守の
うたきけば。

己が父さん
馬追ひで
日にち毎日
町通ひ
朝の家出は
星明り
晩のかへりは
月が出る
三國峠のまんなかで
里の灯を
みるといな。

子守唄

お庭(には)の晝(ひる)

なアに？
何(なん)がをかしいの？

なんでもない。

だつて
笑(わら)つてるぢやないの!?

いえ、

笑つてやしませんよ。

ホラごらん
又わらつて！

笑ふもんですか
佳いお遊びですこと！

イヤ、
姉ちやんぢき笑ふから！
おまゝごともうしないわ

ねえ、光ちやん！！

ハイ、ハイ、
では、あちらに行つてます
――ウフ、フ、、、、、

アラ、また！
母ちやん――お姉さんがね
――いけないいんですよ――。

お庭のひる

美いちやん

オヤ、美いちやん(
繪がお上手ですこと、
お玉杓子の行列ですね。

マアひどい！
さうぢやなく(つ)てよ、
鳩ポツポだわ。

ホイ、これはしたり、

ごめんなさい〳〵。
今度いふと
ひどくつてよ！

みいちゃん

巡禮娘

小娘の
年は十五か十三か
菅の小笠に
法の杖
紙附草履に
白脚絆。

唄ふをきけば
巡禮歌

「故郷を
はる〳〵こゝに
紀三井寺
花の都も
近くなるらん」

語るをきけば可憐や
顔も見知らぬ我母を
尋ね〳〵て遥々と
北の國より旅立ちて
諸國札所の寺々に

彌陀のたすけを
仰ぎつゝ
西國巡禮
するといな。

巡礼むすめ

お島

お島可哀や
十二で子守
花も蕾の
いたいけ盛り
親に離れて
苦勞する。

お里戀しや
あの山越えて
里に行きたや

かへりたや。
ねんねころ一
眠た子は可愛
ねんねしないで
泣かれる時は
子守のつらさが
身にしみる。

小さな母

人形のマリ子よ
なぜ泣いた
何がつらくて
泣いてゐた?

私は何も
しないのに
ベスが私を
いぢめます

お手をかんだり
つねつたり
お衣をこんなに
ひきさいて！。

泣くなよ**マリ子**
佳いにんぎやう
私のゐない
るすの間に
ベスがそんなに
いぢめたか

叱つてあげます
母ちやんが
泣くなよ**マリ子**
よい人形。

オテガミ

郵便さん〳〵
ポストに入れた
オテガミは・
僕のだいじの
手紙です
私の好きな
ちい様に
早くとゞけて
下さいな。

オテガミ

紫のインキをもつて
ペン持つて
あたしもオテガミ
書きまする
うれしい返事の
來るように。

飛行機

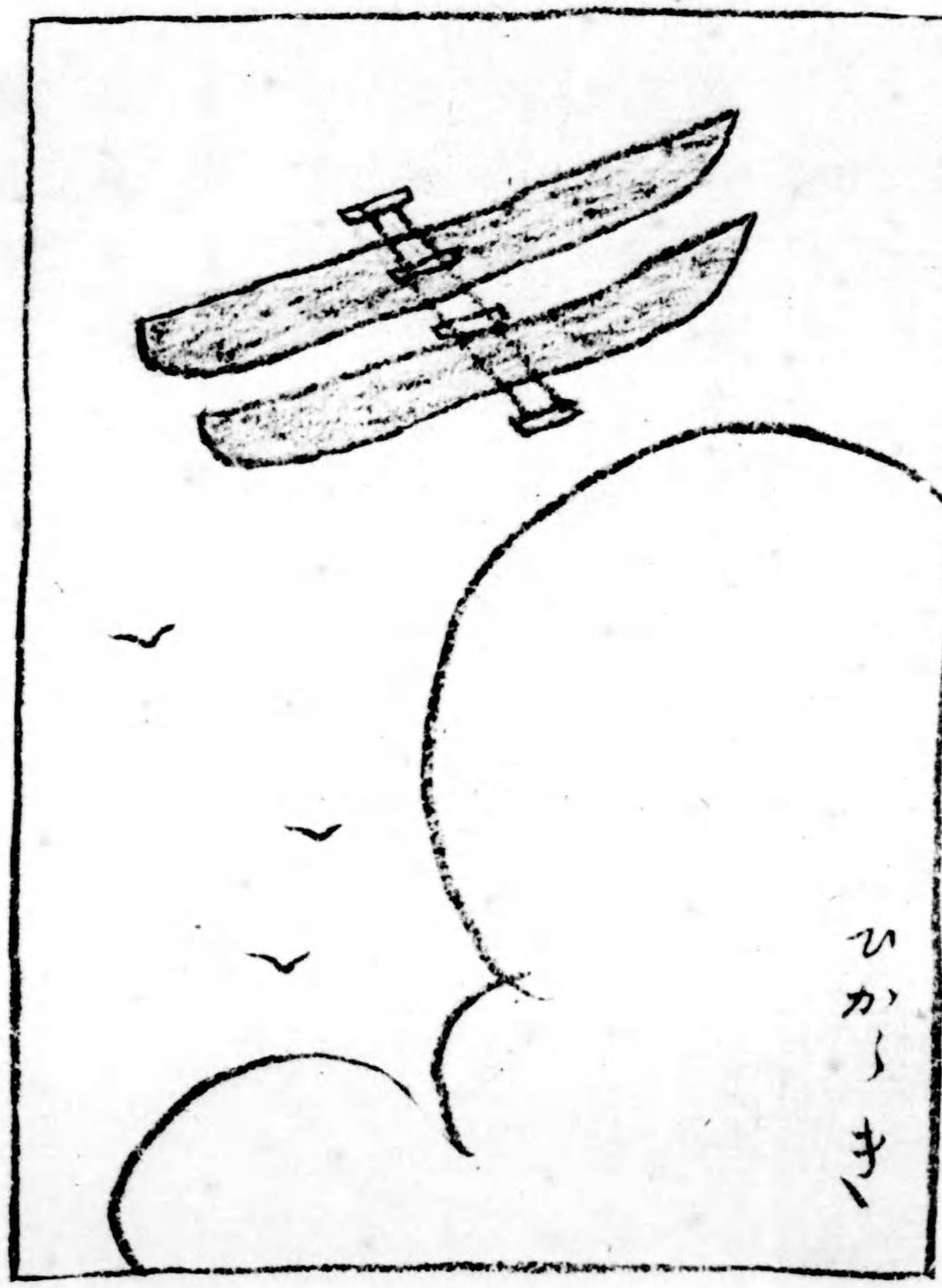
一

あがれ飛行機
天まであがれ
飛べよひかうき
西から東
ワッショ〳〵。

二

とぶは飛ぶは
飛行機とぶは

烏のやうに
つばめの如に
ワッシヨ〳〵。



案山子

一

みの着て笠きて
弓もつて
明けても暮れても
田の中で
ごきげんよろしう
案山子さん
北風さむいぞ
雨も降る

病氣をするなよ
案山子さん。

二

よくこそ私に
御深切
わたしもそれとは
知りながら
矢張かうして
立つてゐる。

仁王様

お寺の門の
仁王様
いつも裸で
力んでる。
紙の礫を
なげられて
それでもすまして
ゐる人は
どこかで烏が

笑つてる。

仁王様

めくら鬼

一

めかくし鉢卷
しつかりしめて
鬼さんどちら
手の鳴る方へ
鬼の來ない間に
豆いつて食はそ。

二

おつと！　あぶない

柱がござる
お手はぽん〳〵
こちらへござれ
好きな子供が
お舌を出して
ピヨン〳〵〳〵と
躍つてる。

けんくわの後(あと)

お父(とう)さん――！

ハイ。

撲(ぶ)つ子(こ)は、鬼(おに)ですね?!

えゝ、さうです。

ほら、ごらん！。

泣く子は弱蟲でせう、

父さん？！

えゝ。

ほら、どうだ！

跡

新しい靴はいて、
ぐつと踏めば
革が鳴る
輕い足どり。

うす雪の積つた
廣い路、
ひとりで行けば
跡がつく。

かゝとは丸く
爪先細く
僕が踏んだ
靴の跡。
學校行きを
誘うて歩く
雪のちらつく
町の朝。

おしばゐ

秀ちやん、誰だ？

加藤清正だ。

武ちやん、は？

楠正成だ。

いざ、勝負〳〵。――

カチン、カチン――

やア！

やア！

ちエつ！ほんとに撲つんだもの、

秀ちやん――。

ごめんよ、あたつたんだから――

――厭だ！もう止したと――。

おしばい

小さな客

銀の小さな
匙もつて
くる〱と
かきまはす
コーヒ茶碗の
白い色。
テーブルの
上に半分

胸出して
圓ら眼で
コーヒをすゝる
小さな鳩よ
可愛い客よ。

不思議(ふしぎ)

よオつてば
母(かあ)さん！。
しつこいわね。
だけどもさあ!!。
言(い)つてあげたちや
ありませんか。

でも、一寸ですもの!!!。
あれで可いのよ。
ねえ、母さん、
お月様何うして
落ちないの？

ごはんの後

小さなお手に
おほきな林檎
庖丁あてれば
つるりとすべる
皮をむく手の
危げさ。

どちらが長い、
ぼくのがながい、

いえ〳〵。私のよつぽど長い。

＊　＊　＊　＊

ごはんの後の
にぎやかさ。

秘密

言つちや厭よ。

あゝ。

きつと？

あ、屹度！。

ねえ、

あのね――。

言つてごらん

いゝ事よ。

早く、さあ！。

ベスの赤ちやんを――。

何うしたの？

留守の間に一つ――。

捨てたの？

いゝえ、

…………

抱つこして來たの！。

どーれ!?。

こんな可愛いの、
ホラ、
ねえ——。

おはなし

むかし〳〵

あるところーに……、

お爺さんとお婆さんとが

あつたのでせう？

いえ、

さうぢや有りません。

ではだアれ？

一人のお嬢さんが
ありました。

そして何うしたの？

ある日、幼稚園で
お飯事をしてゐますと、

それから？

ベスが駈けて來て、

まア！
お膳をころがして、
いやなお姉さん！

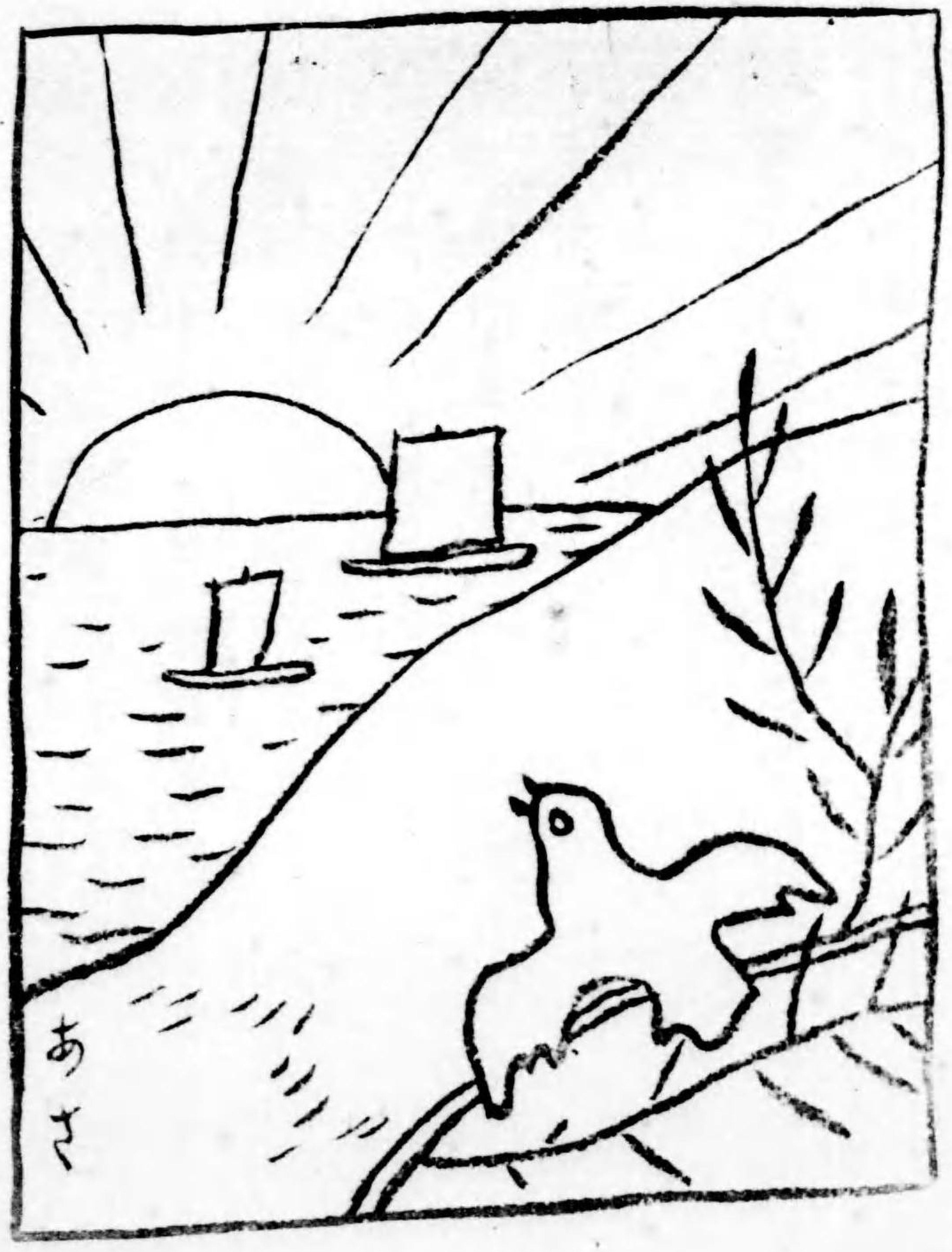
逃げると、
お嬢さんが——

まアひどい！
泣きましたとさ。
ひどいわ、お姉さん！
こんど云ふと
きかなくつてよ！
ハイ、ハイ。

朝

東の空に朝日がのぼる
昇る朝日はキラキラキラキラと
海と山とにかがやきわたる。

海に照るとき白帆があがり
山に照るとき小鳥が起きる
起きた小鳥は坊やを起こす。

起きた坊やはオハヨー濟まし

御飯を食べて元氣に元氣
いそいで行きます幼稚園。